

Title	「東遊日記」に描かれた日本人の身装文化：日清修好条規の調印から日清戦争の勃発前までの時期を中心に
Author(s)	劉, 玲芳
Citation	間谷論集. 2017, 11, p. 211-236
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/89844">https://doi.org/10.18910/89844</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈研究論文〉

## 「東遊日記」に描かれた日本人の身装文化 —日清修好条規の調印から日清戦争の勃発前までの時期を中心に—

劉 玲芳

### 1. はじめに

日本と中国の交流の歴史を振り返ってみると、もうすでに2000年以上も遡ることになる。しかし、将軍が支配する江戸幕府と満族支配の清朝の時代、両国はともに鎖国政策を採っていたため、日中間の交流は長い間、日本の長崎という一隅を通し、一部の商人だけによって行われていた。こうした局面を打開したのは1871年に調印された日清修好条規であった。そこから1894年の日清戦争の勃発まで、つまり1871年から1894年までの24年間、日清両国は互いに公使館を設置し、公使を派遣することによって、ようやく日中文化交流に有利な基礎を築いたのである<sup>1</sup>。

日清修好条規が調印された6年後の1877年、初代駐日公使の何如璋が清国使節団を率いて、東京に到着した。それ以降、多くの中国人が次々と渡日したが、彼らは日本での体験や感想を日記、あるいは旅行記の形で書き残してきた。そうした日記や旅行記は書かれた時代に関係なく、総じて「東遊日記」と称されている。「東遊日記」の主な著者は、明治以降初めて日本に渡航した中国人たちであるため、彼らの「東遊日記」には日本という異文化に対する好奇心が表現されていたり、さまざまな事象に対して評論する部分があったりする。その中には、日本人の服装や髪型、身体意識など、いわゆる「身装文化」に関する記述もたくさん残存している。

「東遊日記」を用いた身装文化研究は既にいくつかあるので、まずはそれらについて概観しておこう。そうした研究のうち、賈莉の研究は清末に日本に渡った中国人の官僚の「東遊日記」に注目したものであった。だが各作品についての分析が不十分であり、結論には偏見のような部分が多々見られる。結局、これは概

説の域を出ないものとなっている<sup>2</sup>。次に、馬興国は日中服飾の文化交流について考察しようとしているが、主に日本に対する中国の服飾文化の影響について論じたものであることや、時代を特定しておらず、それぞれの出来事がいつの時代に起こったことか、まったく判然としない。ただ、少なくとも近代以降のことについて論じていないことは確かである<sup>3</sup>。

そこで、本研究は先行研究の不十分な点を把握した上で、日清修好条規の調印から日清戦争の勃発前までの時期の中国人によって書かれた「東遊日記」を中心に、中国人が見た日本人の身装文化を論じるものである。「東遊日記」の内容を具体的に分析することにより、他者（中国人）の視点を通して、現代の日本人の視野から消えてしまった明治時代の社会風俗や文化の一面を明示することができるだろう。さらに、近代も含め一般的に「服装」には、強いアイデンティティが包含されている。したがって、「服装」という視点をを用いることは、日清戦争以前の中国人の日本人観を理解するために、非常に有意義な観点であると考えられる。

最後に、研究方法に関して言えば、本稿ではまず、中国人の渡日の時間、目的、社会背景などの情報を総合的に考察した上で、彼らが書いた「東遊日記」について分析する。そして、「東遊日記」の具体的な作品を一次資料とし、そこに日本人の身装文化がどのように描写されているのか明らかにする。最終的には、日本人の身装文化に対する記述から、中国人の日本人観を読み取ることが目標としている。

なお、引用漢文（原文には句読点がない場合）には、適宜句読点を補ったことをあらかじめ断っておく。

## 2. 渡日した中国人と「東遊日記」

上述したように、日清修好条規の調印により、日本と清国は平等な国交関係を構築し、互いに公使館を設置することになった。その後、多くの清朝の官僚たちや民間の文人たちが外交公務や視察、観光などの目的で渡日した。彼らが書き残した日記や旅行記の資料は総じて「東遊日記」と呼ばれるが、当然、そこには多くの文章が含まれている。

では、中国人が書いた「東遊日記」とはどのようなものであったのか、彼らが

次々と渡日した19世紀後半はどのような社会であったのか、日本に渡航した中国人はどのような人たちだったのか、こうしたことを以下順に明らかにしていこうと思う。

## 2.1 「東遊日記」とは

先にも述べたが、渡航した中国人が残している書物は総じて「東遊日記」と称されているが、それはどうしてだろうか。

佐藤三郎は「東遊日記」という語の中の「遊」には「家を離れて他の郷に行く」という意味があるので、「東遊日記」は「東の方向に進んで旅をしている時のことを記した日記」であり、また朝鮮に関するものを除けばそれは「日本国内を旅行した時の日記」という意味であると述べている<sup>4</sup>。では「東遊日記」という名称は何に由来するのだろうか。「東遊日記」の研究の先鞭をつけた実藤恵秀は、当時の中国人によって書かれた書物の題目に「東遊」、あるいは「東游」の二字がよく用いられていたため、これらの日記類に「東遊日記」という総称を付けたという<sup>5</sup>。ただし、これは日本側からの呼称である。

中国では日本に渡航した中国人が書いたものを総じて「域外旅行記」と称し、海外旅行記の類としてまとめている。この中には、日記や漢詩など、雑多なものが含まれているが、それら旅行中に書かれたものをすべて旅行記としてまとめているのである。中国では、古代から文人の間で旅行記を書く習慣がすでに定着しており、現在もその習慣が残っている。旅行記の歴史は先秦時代に始まったもので、秦漢—南北朝の形成期を経て、隋唐—元の時代に大いに発展し、明清前期には最盛期を迎えた。そして清朝後期—中華民国の時代には変革期に入ったという<sup>6</sup>。変革期とされる清朝後期—中華民国の時代には、海外旅行記が著しく増加した。中国人が西洋や日本に渡り、旅行中の見聞記や感想などを残したのは、この清朝後期から中華民国の時代までの期間であった。

ところが、この時期の日本に関する「海外旅行記」には、従来の文学作品と異なり、日本研究の情報源としての一面がある。当時の社会背景から見れば分かる。当時の複雑な国際環境の中で、清国において、明治維新をきっかけに大きく変化した日本に徐々に関心が高まり、日本を研究しようとする動きがあった<sup>7</sup>。

この中に、とりわけ日本に派遣された公使や公使館の館員らは日本人の官僚、文人などと交流を行い、見学・調査をした後に、まとめて書いた資料を残している。したがって、彼らによって書かれた「海外旅行記」には、清政府の情報源としての性質があることを見逃してはならない。

以上からわかるように、渡日した中国人が書いた書物を日本では「東遊日記」と名付け、中国では「海外旅行記」という異なる名称で呼んでいるが、本稿では「東遊日記」を統一して用いることにする。

## 2.2 日本に渡った中国人

日清修好条規が調印される以前は、日本に関心を示し、自主的に日本を研究するような清朝官僚はきわめて少なかった。さらに、日本から直接情報を入手する手段を持たなかったため、中国で流布していた日本に関する情報は断片的、かつ主観的なものばかりであった<sup>8</sup>。しかし、日清修好条規調印後の1877年に初代公使何如璋が公使館員たちを率いて来日したのを皮切りに、多くの中国人が渡日し、明治初期の日本の政治や社会の諸相を直接観察、調査するようになった。

日本に渡航した中国人は様々な身分の人がおり、渡日の動機やきっかけは実に多様であった。本稿では、日清修好条規の調印から日清戦争の勃発前までの期間に、日本人の身装文化に関する記述を書き残した9名の中国人を取り上げる。

表1：1871-94年までに渡日した中国人一覧

書名 (初版出版年)	著者名	身分	滞在時間・目的	滞在地・渡航手段
『東行日記』 (1876)	李 圭 (1842-1903)	浙海関文書係	・1876年5月、10日間 ・フィラデルフィア博覧会に参加するため、横浜を經由	・長崎、神戸、大阪、横浜など ・三菱「宣發達」号
『使東雜咏』 (1877) 『使東述略』 (1877)	★ 何如璋 (1838-91)	初代駐日公使	・1877年11月-1881年12月、4年間 ・外交公務	・長崎、神戸、大阪、京都、横浜、東京 ・軍艦「海安」

『使東詩録』 (1877)	★ 張斯桂 (? -1888)	副公使	同上	同上
『日本雜事詩』 (1879) 『日本国志』 (1895)	★ 黄遵憲 (1848-1905)	初代駐日公使 館書記官	1877年11月-1882年 春、4年間	同上
『談瀛録』 (1879)	王之春 (1842-1906)	道員(役人)、 後に広西総督	・1879年12月-1880 年1月 ・1ヵ月の旅行、実 は日本の軍備、国 内情勢の視察のた め	・長崎、神戸、大阪、 横浜、鎌倉、鹿児 島など ・三菱「隅田丸」、 「東京丸」
『東槎閑見録』 (1887)	陳家麟 (不詳)	三代目駐日公 使館員	・1884年11月-1887 年11月、3年間	不詳
『日本風俗』 (1891)	付雲龍 (1840-1901)	兵部郎中、外 交官	・1887年11月-1888 年5月、6ヵ月、 1889年5月-10 月、5ヵ月	・東京など
『道西齋日記』 (1892)	王詠霓 (1839-1916)	駐独公使館員	・1887年5月-6月、 1ヵ月 ・帰国途中に訪問	・横浜、東京、神戸、 大阪、京都、奈良、 長崎 ・三菱「東京丸」
『東游日記』 (1894)	黄慶澄 (1863-1904)	安徽省潜山県 参謀、書記	・1893年5月-7月、 2ヵ月間 ・旅行	・神戸、横浜、東京、 須磨、大阪、京都 ・三菱「神戸丸」、 「横浜丸」

「★」は駐日清国公使館の最初のメンバーである。

この表を主に三つの方面から分析してみよう。

まずは、彼らの社会身分を見ると、ほとんどの人が清朝官僚であることがわかる。ここから、当時日本に渡航した中国人の多くは、教養のある知識人層であり、一定の権力を握っている社会的身分の高い人々であったことがわかる。彼らは官僚集団であるが、約半分は外交官である。たとえば、初代駐日公使であった

何如璋や、副公使の張斯桂、兵部郎中（兵部所属の高級官員）の付雲龍、駐ベルリン中国公使館の外交官の王詠霓はいずれも高級官僚であり、残りの約半分は書記官、道員（役員）、地方参謀のような中下級官僚であった。

滞在時間については、主に二つのパターンに分けられる。9名の中で、1年以上の滞在歴を持つ人は4名である。短期滞在は5名で、その中でもっとも長い人は合計11ヶ月だったのに対し、もっとも短い人はわずか10日間だけの滞在であった。

日本での滞在地については、表からもわかるように、主に関東圏（東京、横浜）、関西圏（大阪、神戸、京都）、長崎に集中している。その理由として考えられるのは、①いずれも日本の代表的な都市であり、観光や視察がしやすいという利点があること、②横浜・神戸・長崎には華僑が多く集まる居留地があり、中国人同士との交流が可能な場所であること、③三菱の航路上にあることなどが考えられる。汽船が寄港する場所で上陸し、観光や視察を行った例は決して少なくない。

以上の情報を踏まえた上に、中国人が書いた資料には、日本人の身装文化について、どのように記述しているのだろうか。それを以下で見ていきたい。

### 3. カルチャー・ショック

#### 3.1 お齒黒・眉剃り

先述したように、日清修好条規締結以降、中国はようやく日本に関心を持ち始め、外交官や知識人など、来日する中国人たちも急増した。当然のことながら、そのほとんどは初来日する人たちであった。彼らにとって異国の風俗文化は、非常に大きな衝撃を与えたようだ。その中でも特に注目されたのは、女性のお齒黒と眉剃りの風習であった。

たとえば、『使東雑詠』（1877）の第11首は、

編貝描螺足白霜 貝を編み、螺を描き、足は白霜のごとし  
 風流也稱小蛮装 風流也は小蛮装と称す  
 薙眉涅齒據何事 薙りし眉と涅めし齒は何事にか據るや  
 道是今朝新嫁娘<sup>9</sup> 道う。是れ今朝、新たに嫁ぎし娘と<sup>10</sup>

という女性の風俗に関する漢詩である。この詩は、初代駐日公使・何如璋一行が軍艦「海安」号で日本に渡る途中、水や石炭などの補給するために長崎へ寄港した際に書かれたものだと思われる。当時の日本人女性（この場合は長崎の女性）には、結婚すると、歯を黒くし、眉を剃るという風習が残っていた。その風習に対する驚愕の気持ちを表し、不思議に感じて詠じたものである。また、詩の注において「長崎の女子は已に嫁げば、則ち眉を剃りて其の歯を黒うす。国を挙げて旧俗はこと皆な然り、殊に怪む可しと為す」<sup>11</sup>と感慨している。初めて日本に上陸した何如璋は、長崎だけでなく、日本全国にこのような陋習があると聞いたので、それをいっそう奇異だと感じたのだろう。

何如璋が来日した8年後の1884年に来日した駐日公使館員・陳家麟も「(引用者注：日本人女性) 逾年長適人黒齒雍眉 雖平時貌之姣麗者至此已類無鹽矣」<sup>12</sup>と記している。つまり、たとえ美しい女性であったとしても、お歯黒と眉剃りをすると、大体の人は醜い人になるだろう、と酷評しているのである。

つまり、当時、来日した多くの中国人にとって、中国の女性の中で想像しにくいお歯黒や眉剃りの風習は、むしろ美から遥かに遠ざかるような文化であり、それを受け入れることは相当困難なことであったのである。その理由としては、日本人と中国人の審美観には相当大きな差があったからだと考えられる。具体的に言うと、長細い眉が中国人女性の理想的なタイプであるため、眉が短い場合、「青黛」という濃い青色の顔料を使って化粧するのが一般的だったようだ<sup>13</sup>。また、歯に関しては、文人が描く美人には「明眸皓齒」という言葉が用いられた<sup>14</sup>。この言葉は目が明るくて歯が白い女性という意味である。これが当時の美人のもう一つの基準であったのである。しかし、日本人女性は中国人女性とは完全に逆で、眉を無くしたり、白い歯をわざわざ黒くしたりする。それは当時の中国人たちには、理解しがたい風習であった。

### 3.2 下着

「東遊日記」には、裸の意識の違いにより生じたカルチャー・ショックも多く記されている。たとえば、浙海関の文書係として長年勤めていた李圭は日本での見聞を以下のように記述している。



國中船夫、車夫及工作之徒，多赤下体，僅以白布一條，疊為二寸闊，由臍下兜至尻際，直非筆墨所可形容者。聞商人中，亦不着褲，惟裹帛幅，女子亦然<sup>15</sup>。

訳：国内どこでも、船夫・車夫・職人などは、裸になっていて、二寸ぐらいの幅に折りたたんだ一本の白布で下半身臍の下から尻のところまで包んでいるだけで、何とも筆では言い表せないような者が多く、聞くとところによると、中流階層の人の中にも、下着をはかずに布切れだけで局部を包んでいる者があり、女性の中にもそうしている者がいるということである<sup>16</sup>。

1876年はアメリカ合衆国建国100周年であった。この時、アメリカは各国との修好親睦を目的として、フィラデルフィアで博覧会を開催することを決めた。これに参加するため、李圭は浙海関の文書係として随行してアメリカに渡航することになった。上記の文は彼がアメリカに向かう途中、10日間横浜で滞在していた時に書かれたものである。短い滞在期間だったにもかかわらず、日本人の男性の労働者の中には少ない白布（褌のことであろう）を腰につけるだけで、下半身を大幅に露出する人が非常に多いことに李圭は気づいた。彼が見た日本人の裸の場面は、一般の中国人の想像を超えたものであり、言葉では表現できないほど驚いたようだ。さらに、日本人の商人や女性も下着を穿かないことを聞いた。現在でいう和服（着物）が主流であった当時の日本では、下着を穿くような習慣はなかった。それは彼にとって、まったく信じ難いことであったようだ。

日本人女性の下着の問題については、他の中国人の著述にも見出すことができる。たとえば、駐日公使館の書記官を最初に務めた黄遵憲の『日本雑事詩』を見てもよい。

女子亦不著褲，裡有圍裙，禮所為中單。漢書所謂中裙，深藏不見足。舞者回旋偶一露耳。五部洲惟日本不著褲，聞者驚怪 後略一引用者<sup>17</sup>。

訳：女子も袴をはいてゐない、着物の下に圍裙がある。それは「禮」中單といひ、「漢書」に中裙といふもので、深く隠し足を見せない。舞をするものが廻

旋すると、ときたまちらりと見えるだけである。五大洲のうちで 日本だけが袴を着けないといふこと、驚きあやしむもの 後略—引用者<sup>18</sup>。

黄遵憲は後に『日本国志』(1895) という日本研究の大作を残した人物である。光緒帝は彼を非常に賞賛し、『日本国志』を元に 1898 年の「戊戌変法」を制定、施行して、日本の明治維新を模倣しようとしていたほどだ<sup>19</sup>。非常に有能で知識が豊富だった黄遵憲であっても、日本人の女性が袴だけではなく、下着さえも穿かないことに驚きを隠せなかったようだ。さらに、五大洲のうち、日本だけにこのような風習があることを、非常に奇異なことだと感慨深げに記している。

また、同様の記述は、黄慶澄が 1893 年に 2 ヶ月間日本を旅行した際の見聞録『東遊日記』(1894) にも見える。この時、最初の李圭の記述からすでに 10 数年が経過しているが、黄慶澄の記述には単に「惟下体不着袴」<sup>20</sup> とあるだけで、そこには黄遵憲が示したような驚愕した様子はまったく読み取れない。この間に、おそらく中国人の間で、こうした事実がある程度広まっていたのではないかと推察される。

だが、なぜ中国人は日本人の下着を着用しない風習に対して、これほど驚いたのだろうか。実は、19 世紀末の段階で日中両国の間に裸に関する意識の違いがあったからだ。中国では、熱いと感じた時、上半身の服を脱いで上半身を裸にする男性(主に労働者)はいる<sup>21</sup>が、日本人のように下半身を少ない布で隠し、足やお尻を大幅に露出することは想像不可能なことであった。

以上、初めて日本に上陸した中国人が日本人の化粧・服装風俗や裸から受けた様々なカルチャー・ショックについて見てきた。このようなカルチャー・ショックは、日中両国の異文化から生じた審美観と考え方の差異に起因するものと考えられる。

#### 4. 明治維新後の洋装

1872 年にイギリス人によって創刊され、後に中国人の主筆らにより大きな発展を遂げ、日清戦争以前の中国においてもっとも大きな影響力を持っていた新聞に『申報』というものがあつた。鄭翔貴の研究によると、『申報』におい

て、1872-93年の期間に日本の服飾改革に関する新聞記事が26件あり、とりわけ1872-79年の間は16件があり、他の日本の文教関係の記事に比べ、二番目に多かったという<sup>22</sup>。このことから、日清戦争以前、とりわけ明治維新後、初期の段階において、日本の服飾改革や服飾風俗の変化に対して、中国人が強い関心を示していたことがわかる。『申報』の記事の多さが示しているような強い関心が、「東遊日記」の同時期の記述にも見える。

明治新政府は、1870年から陸軍をフランスに、海軍をイギリスに範を取り、軍服の服制を改正した。同年、有位者制服や工部省官員服などにも洋服を採用し、1871年には警察官服、郵便夫服、兵部省官員服、そして1874年には鉄道員服なども洋装化した<sup>23</sup>。こうした上からの洋装化は、当時の東アジアにおいてきわめて珍しいことであった。

それでは、渡日した中国人は日本人の洋装化をどのように見ていたのだろうか。それを次に見てみよう。

前節でも紹介したように、1876年、李圭は日本を経由して、アメリカのフィラデルフィア博覧会へ向かった。彼は途中日本で滞在していた折、日本での見聞を『東行日記』（1876）に記しているが、そこには日本人の洋装現象についての記述がいくつか見える。

たとえば、長崎においては「各街設巡捕，若上海然，而皆為日人衣泰西服色」とし、上海の巡査と同じように日本人の巡査も洋服を着ていると述べている<sup>24</sup>。一方、東京では「宮闕、衙署、武營、兵制半倣西式，職官兵士巡捕及一応辦公之人，皆泰西裝約束。聞其國君后，命婦亦然」<sup>25</sup>として、長崎では巡査だけだった洋服が、東京では官吏や兵士、巡査などすべての公人が洋服を着ていること、さらには明治天皇や皇后までもが洋服を着用していることに非常に驚いている。宮殿・役所・兵營・軍隊制度は半ば西洋式を真似していることはだいたい予想できたことであったが、服装までも西洋人のものに倣い、しかも皇族までも着用しているという現実は、どうやら彼の想定を超えるものだったようだ。

李圭の日本滞在期間はわずか10日間という短いものであったが、明治維新後の日本が西洋の学問や西洋の制度を模倣することにより、「よく本を強め、幹を弱くして東洋に雄視するようになった」<sup>26</sup>とある程度の成果を上げていることを

肯定的に捉えている。ただし「惜しいことに、曆を陽曆に替え服装を西洋風に改めたというような点は、思わざるも甚だしいという傍りを免れないだろう」<sup>27</sup>と、日本の洋装化は行き過ぎだという感想も持ったようだ。

上述した黄遵憲の『日本国志』第35巻（礼俗志2）にも、明治維新後の洋装化の現象についての記述がある。

維新以來，競事外交以謂寬袍博帶失則文弱，故一變西服以便趨作。自高官以至末吏上，無不絨帽毡衣脚蹠烏皮靴，手執鞭杖，鼻撐眼鏡。富商大賈豪家名士風氣所尚，出必西式<sup>28</sup>。

明治維新以降、日本の高官から下級の官吏に至るまで、帽子を被り、西洋風のコートを着用し、黒い革靴を履き、手に杖、鼻にメガネの格好の人がほとんどであり、裕福な商人や名士らも政治家の風習に従い、洋風を尊び、外出する際必ず西洋式の格好をしているというのだ。これが黄遵憲の目に映った明治の日本人の様相であった。

同時代の中国では、上海、広州など一部の外国人が多く暮らしていた港の都市を除いて、洋装はまだ認知度も低く、またほとんど浸透していない状態であった<sup>29</sup>。それに対し、隣国の日本人は伝統の服を捨て、完全に西洋服を模倣して着ていた。その姿が黄遵憲に深い印象を残したのだろう。

この記述に続き、黄遵憲は極端な洋装政策を推奨している日本に対して、次のような懸念を示している。

然日本舊用布用絲變易，西服槩以毳毛為衣，而全國尚不蓄羊毛將焉。傳不得不傾貲以購遠物，東人西服衣服雖粲杼軸空矣<sup>30</sup>。

洋服を作るためには、日本の伝統的な糸では製作できず、動物の軟毛が必要である。しかし、日本には羊毛（ウール）が足りないので、外国から輸入するしかない。洋服を着た日本人は立派に見えるかもしれないが、これによって日本の伝統産業は窮地に陥るだろう、と黄遵憲は述べている。彼は経済的な見地から、明

治政府の洋装化政策が日本の伝統産業に悪影響を与えるだろうと判断したのである。

すでに述べたように、「東遊日記」には報告書、調査書のような性質が包含されているため、当然、この裏には、日本の政策例を通して、清朝政府を諷めるといった意味合いもあったのかもしれない。

さらに、黄遵憲は駐日公使館の最初の書記官として、常に公使の何如璋に伴っていたから、日本人の官僚たちと接触するチャンスが多かったと思われる。また、彼は有能な中国文人でもあり、日本人からの憧れもあったため、彼と親交を持っていた日本人官僚も少なくなかったようだ<sup>31</sup>。彼の観察によれば、日本人官僚のほとんどは、家に居る時は洋服ではなく、必ず和服を着用する、とのことであつた。それは「日本人は床に座る習慣があるので、洋服を着ると窮屈で膝が曲がらなくなって、非常に不便である」からだ、と黄遵憲は述べている<sup>32</sup>。当時の日本では、特に男性の場合、洋服は公的な服装、和服は私的な服装という一般認識があつた<sup>33</sup>。そのことと黄遵憲の観察と記述は見事に一致する。

一方、洋服のみならず、日本人男性はヒゲを生やし、西洋人男性を真似するようになった。そもそも、江戸時代の男性は、月代とともにヒゲを剃ったり、抜いたりするのが一般的であつた。ところが明治維新後は、西洋の政治家や軍人たちのヒゲを伸ばす習慣に影響を受け、一部の日本人の男性たちはヒゲを生やすようになった<sup>34</sup>。

黄遵憲は、当時の日本人男性が先を争いながら、ヒゲを伸ばす様子を『日本雜事詩』に書き残している。

對鏡漸看薄薄鬚 鏡に対して看るを愧づ薄薄の鬚を  
 時妝孤負好頭顱 時妝に孤負す好頭顱  
 青青不久星星出 青青久しからずして星星出で  
 間引毛錐學種鬚<sup>35</sup> 間に毛錐を引いて鬚を種ゑるを学ぶ<sup>36</sup>

大意は「本来髭を生やしていなかった日本人は、鏡を見て自分の薄い髭を恥ずかしいと感じる。彼らにとって、髭がないと、いい顔には見えないからだ。よう

やく星のように髭が出てくると、彼らは直ちに髭を植える方法を学び、髭を蓄えるために努力する」というものだ。

この文章は本来ヒゲを伸ばす習慣がない日本人男性が西洋人男性を真似し、ヒゲの伸びを待たせられないほどヒゲを生やしたいという気持ちを持っていたこと、その滑稽とも思えるような様子を揶揄している。

以上、主に日本人男性の洋装化についての中国人の記述を見てきたが、一方、男性に比べ遅れていた女性の洋装化について、中国人たちがどのような記述を残しているのかを見てみよう。

1886年7月、華族女学校に行啓した際に、皇后美子が初めて洋服を着用した。翌年1月に皇后は「婦人服制の事についての思召書」を出し、洋服の合理性に着目して、女性服の改良を進めようとした。

同年5月、長年駐独公使館に務めていた王詠霓が帰国途中に、日本に立ち寄り、約1ヵ月、日本を視察した。その際、王詠霓は「去年皇后名哈羅姑姑為西裝官民婦女亦多倣之、然行路踴蹶亦殊可哂」（『道西齋日記』1892）<sup>37</sup>と記している。皇后が洋装を始めて以降、官僚たちの夫人や一般の女性も皇后の洋装を倣うようになったと記録しているのである。しかし、洋服を着た日本人女性たちが背をかがめてしょんぼり歩く様子は、長年ヨーロッパで暮らしていた王詠霓の目から見ると、非常に滑稽なものであった。

王詠霓を含む、渡日の経験を持つ当時の中国人たちは、明治維新後の日本に注目するようになり、ある程度の成果を認めているが、その一方で伝統服を捨て、西洋服を選ぶ、いわゆる洋装化政策に対して、いずれも否定的な態度を示している。確かに、服装にまだ強い拘りと高いプライドを持っていた清朝官僚にとって、日本人が自国の伝統的な服装を変革することは、非常に不可解なことであり、性急で思慮不足な政策転換であると思われたのである。したがって、彼らは経済、インフラ、教育などの方面では、日本人の欧化政策を賞賛したり、感心したりしたもの<sup>38</sup>、明治維新の洋装化政策に関しては揶揄しながら、批判していたのである。

## 5. 和服の歴史に関する記述

以上のようなお歯黒や眉剃り、下着などのカルチャー・ショック、あるいは洋装化についての主観的な評価以外、「東遊日記」には、日本人の服装の歴史を紹介する記述も見られる。

例を挙げよう。黄遵憲の『日本国志』には、「日本舊服皆隋唐以上遺製，當時遣唐之使冠，蓋相望。上至朝儀下至民俗無不模仿唐製。逮將門顯，政稍趨簡易，然不過損益舊制，大同小異。宋明以下新改服色乃不復相同」とある<sup>39</sup>。大意は「日本の伝統の着物は中国の隋唐時代の服装を真似したものである。奈良時代の遣唐使が派遣されて以降、朝廷から一般の庶民の風俗まで全国で唐のものを模倣し始めた。そして、徳川將軍の幕府が創設した後、簡易な衣服政策を採っていたが、旧来の服制を損なうことがなく、服装には変わりがほとんどなかった。しかし、中国の宋明時代以降、服制が大きく変化したゆえ、こうして日本の服装と中国の服装は異なるものになった」である。

上の記述は黄遵憲の著書に書かれた日本人の服装史の一部である。彼は日本人の服装の源は中国にあるという歴史を明らかにし、中国人に紹介した。これは黄遵憲が様々な資料に基づいて考察した結果であり、当時の中国において史学の視点から日本人の服装を語る最も詳細な資料であっただろうと考えられる。

黄遵憲と同様に、日本人の身装文化と中国からの影響を論じるものは、付雲龍の著作にも見られるものである。付雲龍は、もともと兵部郎中であるが、清政府による1887年の遊歴官選抜試験に首席で合格し、遊歴公使として西洋に渡ることになった人物である。彼は先述した李圭と同様にまず日本に渡った。だが、李圭の日本滞在が一時的だったのに対し、付雲龍はアメリカ、カナダなどを視察した後、再び日本に戻っており、前後合わせて11ヶ月もの間、日本に滞在した。彼は、日本及び南北アメリカを遊歴した旅を通して、多くの貴重な著作を著した。その中で、日本に関するものは『游歴日本図経』と呼ばれているが、これは30巻からなる大部の著書である。

11ヶ月の日本の滞在中に、付雲龍は日本人の服装の源流探しを行った。その一例として『小方壺齋輿地叢鈔』（12帙補編再補編12帙）に収録されている「日本風俗」（1891）という一文を見てみよう。

明治以前士民有笠無冠。先是懿德制天地人三冠時中國周敬王年也。開化八年當漢景帝七年制上中下三等冠後又增三名無頭今烏帽子二名免腰三名蟪頭凡九冠也。天武十一年為唐弘道元年男女始結髮著漆紗冠改定禮儀。今之紗冠烏帽子始此。推古十一年為隋仁壽三年擬隋唐式始定冠色品置十二階賜諸臣冠位，孝德天皇製七色十三階冠又制十九階（後略）<sup>40</sup>

上の内容を要約すると、「日本人の服制は古代の中国を模倣したものである。603年に、隋を真似し、冠位十二階を制定し、そして、孝德天皇は冠位十二階を改定して七色十三階の冠位制を制定した」というものである。

付雲龍の記述は現在の日本服装史とほぼ一致していることがまず評価できる。とりわけ、日本人のことにについて全く知らず、あるいは知っていても誤った情報ばかりだった時代において、このような史実に忠実な記述は史料としての価値が高く評されるものであろう。

上の節で述べたように、「東遊日記」において中国人官僚らが受けたカルチャー・ショックや日本の洋装化についての記述が多く出現した理由は明白であるが、彼らはなぜ日本の服装の歴史についても彼らが関心を寄せたのだろうか。理由は、著者らが持っている使命感によるものだと考えられる。つまり、黄遵憲と付雲龍はいずれも使命感を持っており、できる限り全体的な日本の事情（服飾文化も含む）を忠実的にかつ詳細に著し、当時の中国での日本研究の空白を埋めようとしていたわけである。

上述したように、初代駐日公使である何如璋が東京に着任する前は、中国には、直接日本を観察したり調査したりする手段はなかった。したがって、中国における日本の情報は、断片的で曖昧なものがほとんどであった。明治維新後、ようやく日本研究の重要性が認識され、また文人官僚たちが日本に渡航することが可能になり、日本研究の基礎条件が少しずつ整備されるようになった。

黄遵憲の場合は、当時の中国においての日本研究の状況について非常に不満を抱えており、日本に関する正確な情報を提供することによって、中国人の日本人に対する曖昧な、あるいは誤った認識を変えることを決心した<sup>41</sup>。一方、付雲龍自身が遊歴使として、遊歴した国の実状の情報を提供し、政府の参考にならう



と強い使命感を持っていた<sup>42</sup>。こうして、日本研究の空白を埋めるという使命を持っている黄遵憲や付雲龍は風俗文化の一部である日本服装史について真剣に研究に取り組んでいたのであると思われる。日本の事情を考察する際に、2人とも史学者のような慎重な態度を示した人物である。現在の服装史の視点からも、彼らの忠実な記述は史料として価値が高く評価されている。

一方では、「東遊日記」には、根拠を問わず、中国人と類似する日本人の身装文化を見かけたら、すぐに古代中国の遺風を連想しやすい傾向がある。

例えば、駐日公使館員の随員として1884年から1887年までの3年間日本で滞在した陳家麟が『東槎聞見録』において、

髻有三種其一如必錠式上寬下狹中有布襯名曰島田，一則圓圓一髻中形大如海殼名曰曲丸，皆以地名又有橫臥頂梁如蜂腰中斷兩端成圈者名曰蝴蝶髻。三種均為古雅可愛，日人謂二千餘年從未更翻花樣，疑即吾國上古式也<sup>43</sup>

というように、日本人女性の髪型には高島田や丸髻、そして蝶々髻（関西で蝶々髻と呼ばれるが、実は銀杏返しのことを指す）の三種類があり、どれも優雅かつ可愛らしいものだと紹介している。だが、日本人女性の髪型には2000年以上変化がないと日本人から聞いた陳家麟は、おそらくこの三つの髪型が中国の古代の髪型を真似したものではないかという大胆な仮説を立てている。

陳の仮説が本当かどうかは別として、当時渡日した中国官僚らが日本文化に中国の遺風を探す傾向は確かに存在する。陳が提示した例はこの1つであるが、実は黄遵憲あるいは付雲龍の例もそうである。つまり、上述した2人の使命感とは別に、黄遵憲と付雲龍の記述には、古代中国の遺風を懐かしむような感情が多少感じられる<sup>44</sup>。具体的に言うと、2名が和服の歴史を語り続けていたのは、中国から大きな影響を受けた「和服」を語ることによって、昔の中国の文明と偉大さを顧みることができるという点において、非常に誇らしいことであるからだ。

当時の中国情勢を考えると、清朝政府はアヘン戦争後、西洋列強の侵略に遭い、徐々に衰弱し、国家的に自信を喪失していったが、中級の文人官僚たちは異国である日本で初めて古代中国の文明の残影を発見した。それは中華思想の世界

で出世した彼らにとって、誇らしいことであつたに違いない。

## 6. 賛否両論の日本人観

最後の節では、「東遊日記」における日本人の身装文化の描写を通して、賛否両論あつた日本人観について見てみよう。

まず、黄遵憲は『日本雑事詩』（巻2）第103首「女子」の注において、

女子皆膚如凝脂，髮如漆，蓋山川清淑之氣所鍾也。（中略）七八歳時，丫髻雙垂，尤為可人。長，耳不環，手不釧，髻不花，足不弓鞋<sup>45</sup>

訳：女子はみな膚は凝脂のごとくなめらかで、髪は漆のやうに黒い。たぶん山川清淑の氣のあつまつた所であるからであらう。（中略）七八歳の頃は、お下げにしてとてもかわいい。長い耳には耳環がなく、手には釧がなく、髻にはかざりをつけず、足には弓鞋を穿かない<sup>46</sup>

と、美しい日本人女性の姿を生き生き描いている。黄遵憲が見た日本人女性は肌が白く、黒髪をしている美人であつた。だが、彼女らはイヤリングや腕輪、花などの飾りをあまりせず、さらに中国人女性のように纏足をしていない。ここから、日中両国の女性には大きな美の差異が生じた。中国人女性の派手な美に対して、日本人女性の自然で素朴な美がうかがえる。とりわけ、7、8歳の少女がお下げをしていて、その姿を可愛らしいと黄遵憲は評している。

1879年に来日した道員（当時はまだ下級官員の身分であつた）の王之春は東京の未婚女性と既婚女性についての記述を『談瀛録』（1879）に残している。

東京女子

修眉皓齒髮如黚	修 <sup>なが</sup> き眉　皓 <sup>くろ</sup> き齒　髮は黚の如く
猶是深閨未嫁身	猶お是れ深閨の未まだ嫁がざる身
荳蔻含香宜帶雨	荳蔻は香りを含みて雨を帯ぶに宜しく
海棠為屐豈無塵	海棠は屐と為して豈に塵無からんや

金訶貼乳唐妃子 金訶（ブラジャー）もて乳に貼る唐の（楊貴）妃子  
 羅襪凌波晉洛神 羅襪（絹の足袋）もて波を凌ぐ 晋の洛神（宓妃）  
 不媿此邦為日出 媿ぢず 此の邦は日出為るに  
 勝他南國有佳人<sup>47</sup> 他<sup>か</sup>の南國に佳人有るに勝る<sup>まさ</sup>る<sup>48</sup>

この詩において、王之春は「長い眉」「白い歯」「黒い髪」を未婚の女性の特徴として描いた。また中国詩人が無邪気な少女、女性を描くときによく用いる植物、「荳蔻」（常緑高木）と「海棠」（ハナカイドウ）という語を、日本人女性を喩える際にも使用している。さらに、着物の襟は広く、微かに胸を露わしている日本人女性は、まるで唐の時代の楊貴妃のようだと評したり、彼女らが絹の足袋を穿き、ゆらりゆらり歩く様子は、東晋の有名な画家顧恺之が描いた洛神のようだと絶賛したりしている。

最後の第7、8句では、さすがに日本は日の出の国であるため、他の南の国の美人より一層勝ると王之春は結論づけている。つまり、この詩は日本人の若い未婚の女性は、純粋であり無邪気な可愛いらしい美女ばかりだということを詠じているのである。

だが、既婚の女性に対してはどうだろう。次に示すのは同じ王之春が詠じた「東京婦人」という詩である。

高髻雲鬢大袖垂 高髻雲鬢 大袖垂れ  
 少年裙履亦丰姿 少年の裙履も亦た丰姿  
 項前塗粉連胸流 項前に粉を塗り胸に連なり<sup>せん</sup>流として  
 背後拖紳稱體直 背後に紳を<sup>ひ</sup>拖き体<sup>かた</sup>に<sup>な</sup>称いて直し  
 可惜雙眉菱以盡 惜しむ可し 双眉は<sup>ま</sup>菱<sup>か</sup>り<sup>な</sup>り<sup>て</sup>以<sup>も</sup>って<sup>て</sup>尽<sup>つ</sup>き  
 生憎皓齒涅而銜 生憎たり 皓齒は<sup>は</sup>涅<sup>め</sup>て<sup>く</sup>縮<sup>む</sup>し  
 無襦無袴休嫌冷 襦無く袴無きも冷たきを嫌うを休むるは  
 只為心腸有熱時<sup>49</sup> 只だ心腸に熱時<sup>あつ</sup>時<sup>とき</sup>有るが為なり<sup>50</sup>

彼は前半の4句までは、まだ正面の顔を見ていない女性の後ろ姿を描いてい

る。高い髷と大きな袖を垂らし、首筋から胸まで白粉を塗布し、後ろに服の裾が引きずられて広がっている優美な女性の姿が描かれている。だが第5句から、その姿は一変する。眉を剃り、お歯黒をすることによって、結婚して美しさを無くしてしまった女性を惜しむ感情が表現されているのである。

このように日本人女性、とくに独身女性に対する黄遵憲、王之春らの賛美の声があった一方で、それとは正反対の見方もあった。

たとえば、初代駐日副公使の張斯桂は『使東詩録』（1893）の「東京女子」の注には、「女子皆露胸自頸至胸皆傅粉甚自然粉麤而劣不及中國之宮粉香」<sup>51</sup>（訳女子は皆な胸を露わす。故に頸自り胸に至るまで皆な粉を傅け、甚はだ白し。然れども粉は粗にして劣り、中国の宮粉の香りに及ばず<sup>52</sup>）と書き残している。彼によれば、日本人女性には胸を露わにする習慣があり、そして首筋から胸まで塗布した白粉が白すぎるといふ。さらに、彼女たちが使っている白粉は、粗末なもので、香りも中国のものに遠く及ばないほど劣等のものであるとしている。また、「易服色」という詩には、張は「改装笑擬皮蒙馬，易服羞同尾統貂；優孟衣冠添話柄，匡廬面目斷根苗；見他摘帽忙行礼，何擬従前慣折腰」<sup>53</sup>と記している。つまり、張から見れば、日本人が本来中国人に真似し着ていた素晴らしい衣服（和服）を捨て、西洋人の衣服を着るようになったことは全く釣り合わないことである。さらに、日本人は西洋人を真似し、帽子を脱いで敬意を表すこともなんと滑稽なことであると風刺している<sup>54</sup>。

もう一例は、陳家麟の『東槎聞見録』の中に見られる文章である。それは「男女皆圓領寬袖。冬不衣裘，下繫以裙而無襪，鼻有事則加單褂於外」<sup>55</sup>というものであるが、ここではまず、日本人の男女の衣服は、丸い襟を履き、広い袖のものが一般的であることを紹介している。しかし、冬になっても、彼らは獣の毛皮で作った服を着用せず、下には裙を穿くけれど、下着を穿かない。さらに、寒いと感じた時にも、ただ単に薄い上着を加えるだけで済ませるといふように記述している。

陳家麟のような裕福な中国人には、日本人の服装は貧弱で粗末に見えたのであろう。さらに、彼は、「霜雪嚴寒不用裘貉惟薄棉一二重，男子冠式如中，士僧便帽或布或氈，亦有皮者，皮則多係骨種羊。或磨秃袖頭刺底絨者更以薄氈絨布一方

褻於項中以禦寒，殊不雅觀也」<sup>56</sup>と述べ、嚴冬の中で日本人の男性は暖かそうな毛皮の服を着用せず、かわりに薄い綿の上着を着たり、また、質が悪い帽子を被ったりしている人がほとんどであったと記述している。さらに、薄い生地の手で首を巻いて防寒する（襟巻きのこと）人がいて、非常に見苦しいとも評している。

このように、渡日した中国人の中に、日本人の身装文化を通じて、賛否が分かれる点も存在していたことがわかる。このような差が生じた原因は「東遊日記」の著者個人の考え方の違いによるものだと考えられる。たとえば、黄遵憲はここまで紹介してきたように、非常に進歩的な思想家、詩人であるため、彼の『日本国志』や『日本雜事詩』には、より客観的で確実に日本を研究しようとする基本姿勢がうかがえる。だからこそ、彼の著述には、日本人の賞賛すべきところを率直に評し、服装に欧化政策を採用することに懸念を示した部分がある。一方で、初代駐日副公使である張斯桂は、当時清朝の多くの高官と同じように、非常にプライドが高く、自国文化中心の立場から異文化を俯瞰するような態度を取っていた。特に、彼は日本人の服装改革に対して酷評し、保守的な一面を示した。

## 7. おわりに

以上、本稿では、日清修好条規の調印から日清戦争の勃発前までの期間に渡日した中国人が見た日本人の身装文化について分析した。最後に、その結果についてまとめておこう。

本稿で取り上げた9名の中国人はいずれも初めて日本に渡航したため、異文化に対して強い好奇心や興味を示したのは当然のことだった。女性の肩剃りや、お歯黒の化粧の風習、そして日本人が下着を穿かないことや、下半身を大幅に露出する裸への意識といったものは、いずれも彼ら中国人にとっては非常に奇異に感じるものであった。極端に言うと、当時の彼らから見ればそれらは野蛮な文化であったといっても過言ではない。

また、渡日した中国人はいずれも明治維新後の日本の洋服文化に大きな関心を示した。服装には強いアイデンティティが包含している。渡日した中国人から見れば、伝統服を捨て、他国の服装を着ることは民族のアイデンティティを変える

ほど重要な意味を持つことである。故に、洋装化政策に対しては、黄遵憲が懸念を示し、他の渡日した中国人たちはほぼ同じ態度で、揶揄し、批判していた。

その他には、「東遊日記」には、日本人の服装の歴史を紹介する文章もあった。このような史料は、当時の中国人に日本人の正確な情報を提供し、中国での日本研究を大きく推進させた点において、大に評価できると思われる。さらに、現在の服装史の視点から見れば、その忠実な記述には史料としての高い価値が認められる。だが、これらの文章には、古代中国の遺風を懐かしむような感情が多少感じられることは見逃せない。

また、身装文化に関しても賛否両論の記述があった。日本人、特に若い未婚の日本人女性を高く称賛する人が現れた。だが、それに対し、古い陋習に従い、眉を剃り、お歯黒をする既婚女性に対して、中国人男性は非常に低く評価した。このような賛否両論は主に「東遊日記」の著者個人の考え方の相違に起因するものであろう。

最後に、一つ補足すべきことがある。「東遊日記」における記述は必ずしも中国人が生身で体験し、目で見たものばかりではない。当時の言語、交通、時間、金銭などの現実の問題により、彼らが容易に日本を旅行し、すべての事実を確認することができなかったことは十分考え得ることである。となれば、彼らが当時の新聞や公文書、そして史籍などの限られた資料を見てそれをまとめたり、日本に居留している華僑から情報を得たりして著述した事例もけっして少なくはなかっただろう。それゆえ、彼らの日本人の身装文化に関する記述、あるいは日本人観には時々誤解や偏見や、限界がある。このことは今後の研究において、常に気をつけながら分析していかなければならない点である。また彼らがどういった男性や女性のこと（つまりその対象）を記述しているのかも留意すべき点である。

また、今後の課題に関して簡単に記して本稿を閉じたいと思う。今後もし引き続き「東遊日記」を中心として分析を行うが、日清戦争以降に時代を移していこうと考えている。というのも、日清戦争後の中国では「留学ブーム」が起り、渡日の中国人留学生が「東遊日記」の中に多くの記述を残しているからである。これらの記述に現れる日本人の身装文化を考察し、日清戦争前後の日本人の身装文

化に対して中国人の考えがどう変化したのか、その変遷について具体的に論じてみたい。

## 注

- 1 王曉波『中日文化交流史話』（商務印書館、2007年）6頁。
- 2 賈莉「从“东游日记”看日本服飾习俗及晚清官员之日本服飾观」（『绍兴文理学院学报』第32卷第1号、2012年）98-101頁。
- 3 馬興国「中日服飾习俗交流初探」（『日本研究』第3号、1986年）80-83頁。
- 4 佐藤三郎『中国人の見た明治日本——東遊日記の研究』（東方書店、2003年）4頁。
- 5 同上。
- 6 賈鴻雁『中国遊記文献研究』（東南大学出版社、2005年）31-36頁。
- 7 時培磊「明清日本研究史籍探研」（博士論文）（『南開大学史学理論及史学史』、2010年）、145頁。
- 8 佐々木揚『清末中国における日本観と西洋観』（東京大学出版会、2000年）285頁。
- 9 鐘叔河編『羅森等早期日本遊記五種』（湖南人民出版社、1983年）72頁。
- 10 深澤一幸「王之春の『東京雜詠』『東京竹枝詞』（『言語文化研究』、2011年）153頁。
- 11 深澤前掲論文の中の訳を引用している。原文は「長崎女子已嫁，則○眉而黑其齒。華国旧俗皆然，殊為可怪。」（鐘叔河編『羅森等早期日本遊記五種』（湖南人民出版社、1983年、72頁）。
- 12 陳家麟『東槎聞見録一卷』『小方壺齋輿地叢鈔』（第10帙第5冊、王錫祺編、上海著易堂、1887年）。
- 13 戴爭『中国古代服飾簡史』怪工業出版社、1988年、219頁。
- 14 この四字熟語の初出は三国魏の曹植（曹操の三男）の『洛神賦』という名作である。絶世の美女である洛神を描写するに「丹脣外朗，皓齒内鮮，明眸善睐」を用いている。
- 15 李圭「環游地球新录」鐘叔河編『漫游随录 / 王韬 [著]、环游地球新录 / 李圭 [著]、西洋杂志 / 黎庶昌 [著]、欧游杂志 / 徐建寅 [著]』（岳麓書社、2008年）320頁。
- 16 佐藤三郎前掲書、23頁。
- 17 黄遵憲著『日本雜事詩』（近代中国資料叢刊続編第10輯、沈雲龍主編）文海出版社、1974年、123頁。
- 18 黄遵憲著、実藤恵秀・豊田穰共訳『日本雜事詩』（生活社、1943）260頁。
- 19 王曉秋『近代中日啓示録』北京出版社、1987年、189-190頁。



- 20 黄慶澄『東游日記』(1893)、鐘叔河編『走向世界叢書』(岳麓書社、1985年)、331頁。
- 21 拙稿「日本人からみた中国人の身装文化—1910-40年代の言説を中心に—」『問谷論集』第10号、日本語日本文化教育研究会編集委員会、2016年3月、pp.67-68。
- 22 鄭翔貴『晚清傳媒視野中的日本』(上海古籍出版社、2003年)43-44頁。
- 23 増田美子『日本衣服史』(吉川弘文館、2010年)293-295頁。
- 24 李圭『環游地球新録』(鐘叔河編『走向世界叢書』)岳麓書社、2008年、318頁。
- 25 同上、323頁。
- 26 佐藤前掲書、30頁。
- 27 同上。
- 28 黄遵憲『日本国志』第35卷・礼俗志2、文海出版社1898年刊行の影印版、856頁。
- 29 袁仄・胡月『百年衣裳』三聯書店、2011年、36頁。
- 30 黄遵憲前掲『日本国志』、856頁。
- 31 王曉秋前掲書、80頁。
- 32 原文「又日本席地跪坐西服緊束膝不可屈，殊多不便，故官長居家無不易舊衣者」。黄前掲書、856頁。
- 33 増田美子前掲書、296頁。
- 34 刑部芳則『洋服・散髪・脱刀：服制の明治維新』(講談社選書メチエ、2010年)76頁。
- 35 黄遵憲『日本雜事詩』第140首、鐘叔河編『黄遵憲 日本雜事詩 広注』(湖南人民出版社、1981年)182頁。
- 36 黄遵憲著、実藤忠秀・豊田穰共訳『日本雜事詩』(生活社、1943)258頁。
- 37 王詠霓『道西齋日記』(鴻寶齋、1892年)85頁。
- 38 王曉秋・大庭修主編『中日文化交流体系』(歴史卷)、浙江人民出版社、1996年、283頁。
- 39 黄遵憲前掲『日本国志』、856頁。
- 40 付雲龍「日本風俗」『小方壺齋輿地叢鈔』(12帙補編再補編12帙)1891年。
- 41 王曉秋『近代中日啓示録』北京出版社、1987年、167頁。
- 42 王曉秋著、張麟聲・木田知生共訳「付雲龍の日本研究の業績と特色—『遊歴日本図経』を中心に」、104頁。
- 43 陳家麟前掲書。

- 44 黄遵憲著、実藤恵秀・豊田穰共訳『日本雑事詩』（生活社、1943）201頁 訳注(4)には、「古代支那の遺風として、なつかしむ情が強いかとおもはれる。それは雑事史全部にみなぎる気持ちである」と述べている。
- 45 鐘前掲『黄遵憲 日本雑事詩広注』、147頁。
- 46 黄遵憲著、実藤恵秀・豊田穰前掲書、200頁。
- 47 王之春『談瀛録』巻1、上洋文芸斎新刊、1880年。
- 48 深澤前掲論文、154-155頁。
- 49 王之春前掲『談瀛録』。
- 50 深澤前掲論文、154頁。
- 51 張斯桂『小方壺齋輿地叢鈔』第四集、(王錫祺編、上海著易堂、1893年)。
- 52 深澤前掲論文、155頁。
- 53 張斯桂前掲書。
- 54 鐘叔河編『走向世界叢書』（岳麓書社、1985年）、64頁
- 55 陳家麟前掲書。
- 56 同上。

〈キーワード〉 日本人の身装文化、東遊日記、中国人官僚

**The Japanese Costume Described in The  
“Diary of a Journey to Japan”  
-Focusing on the statement from the “Japan-Qing Treaty of Friendship”  
until the “Sino-Japanese War” broke out-**

LIU Lingfang

**Abstract**

In 1871, the Japan-Qing Treaty of Friendship was concluded by Japan and Qing. From that time to the Sino-Japanese War (1894-1895), many Chinese coming to Japan, the most of them were bureaucrats who were dispatched by Qing Dynasty. On their journey, bureaucrats described what they observed and written their comments on a diary or a travel report, which was called the “Diary of a Journey to Japan”.

This paper will focus on the description of “Japanese costume” (including clothes, hairstyle, body view, etc.) in “Diary of a Journey to Japan”, to clarify the details of what exactly was the “Japanese costume” culture observed by Chinese bureaucrats.

Furthermore, based on the social background of the two countries, this paper will clarify the formation of Chinese perspectives on Japanese at the time.

**Keyword** : Japanese costume, “Diary of a Journey to Japan”, Chinese bureaucrats.